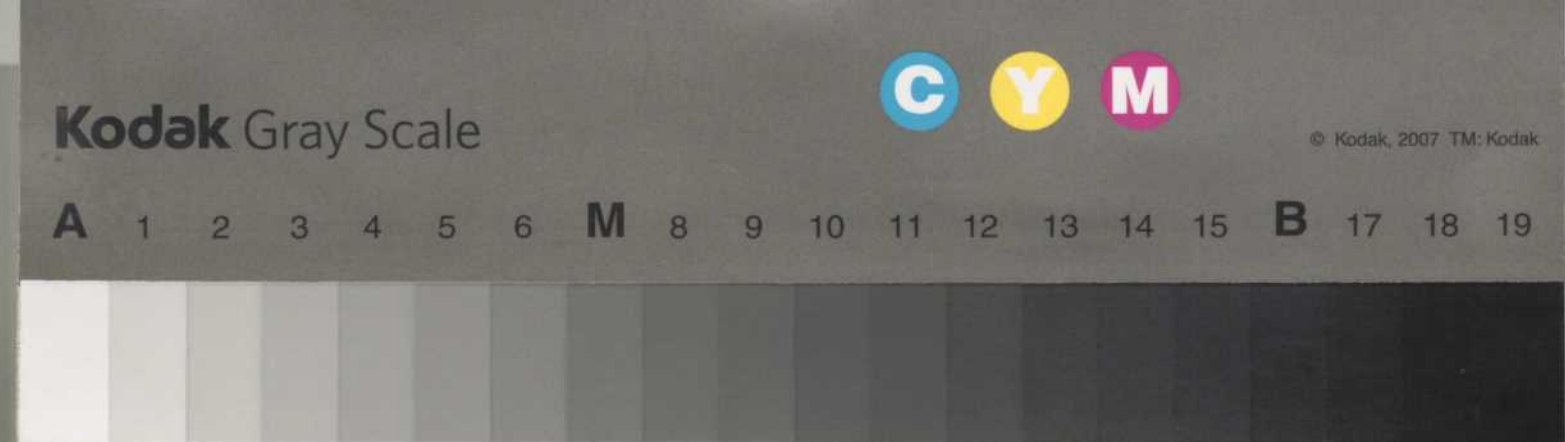




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

243





甚矣哉世人之不好聞人善稱人善也余
頃者聞平藏彌曾八壽滿之有孝行
乃與一二友人俱游于三孝子之近隣而
扣三孝子之事則孝行之跡歷歷可掬
也余乃歎曰余常以謂余能好聞人善
稱人善也而三孝子固與余同鄉而與
余同民人也而至今始聞三孝子之事則
自知好聞人善之不甚也於是余復以謂為

鈴木成雄

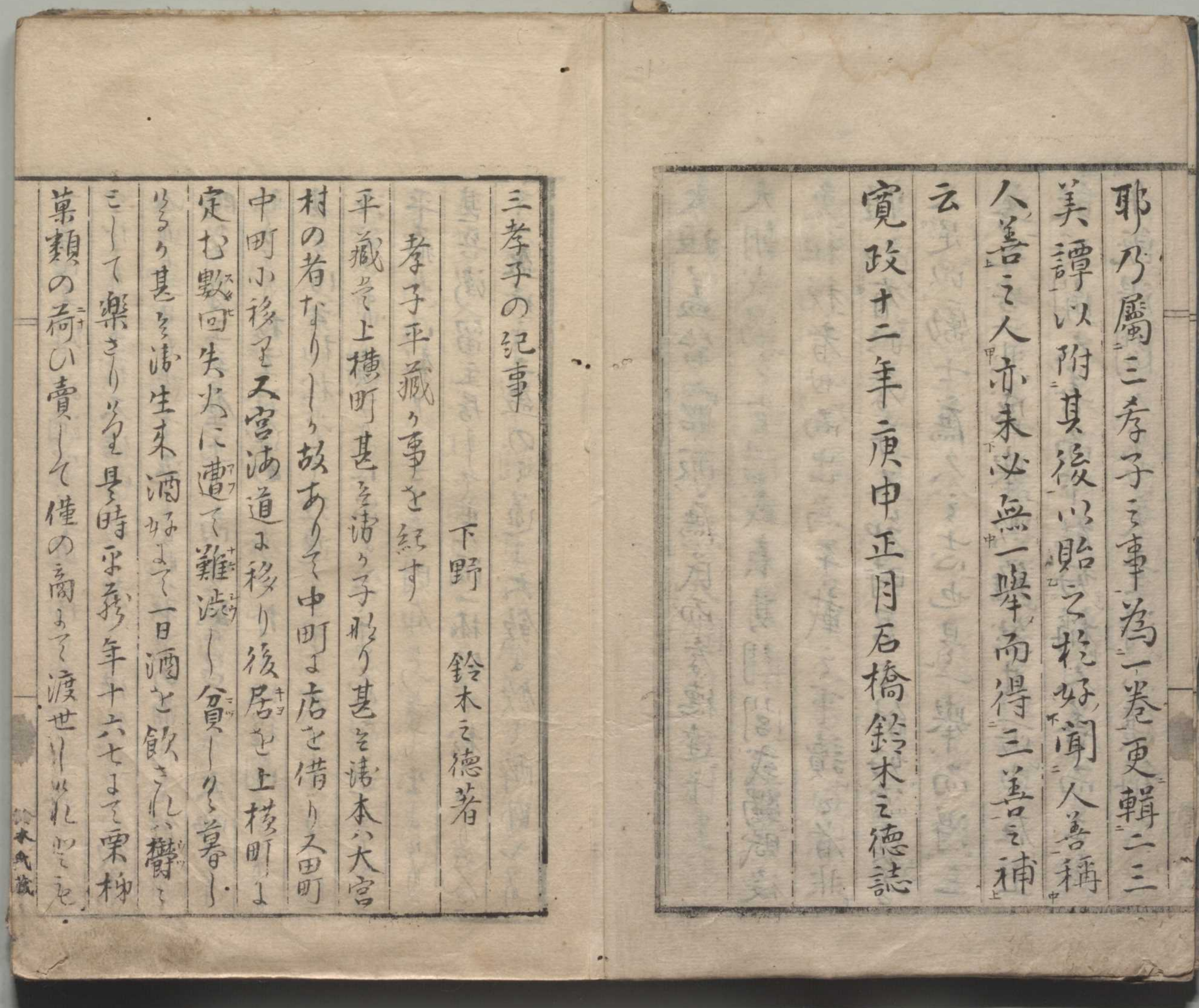




人君者位尊威重而居於廣屋大廈之
中又有太夫士群吏之隔則人君之於
庶民一言之入一事之出豈惟山河千里
之相遠耶是故庶民之賤孝德即義
湮滅不旌為者往往有之然而其所由
在世人之不好稱人善與人君之好聞人
善之不甚而已矣余復稽之舊史若
太倭果安當耆樵夫綱引金村建部

太垣蓋皆窮賤庶民而孝德達于
天朝或賜之官階或表其門閭或蠲賦役
免租稅者世而出焉千載之下讀之者非
惟知有此孝子又知時君之能好德褒善
又知足勵士庶人之志也且一舉而得三
善也豈非盛舉歟雖然其所由在上
能好聞人善而下能好稱人善而已矣
余既得聞人善矣豈得不復稱人善





耶乃屬三孝子之事為一卷更輯二三
美譚以附其後以貽之於好聞人善稱
人善之人亦未必無一舉而得三善之補
云
寛政十二年庚申正月石橋鈴木之徳誌

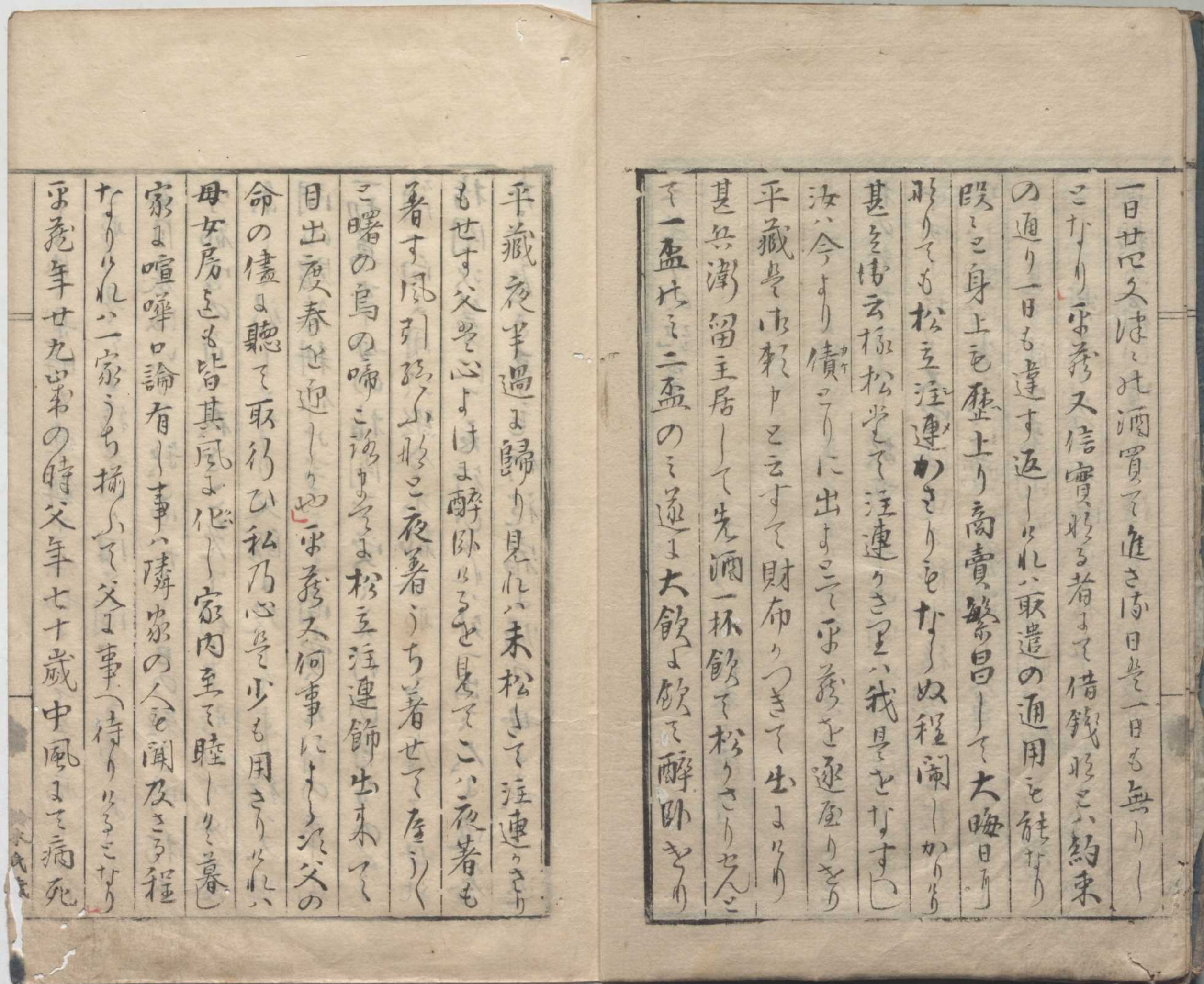
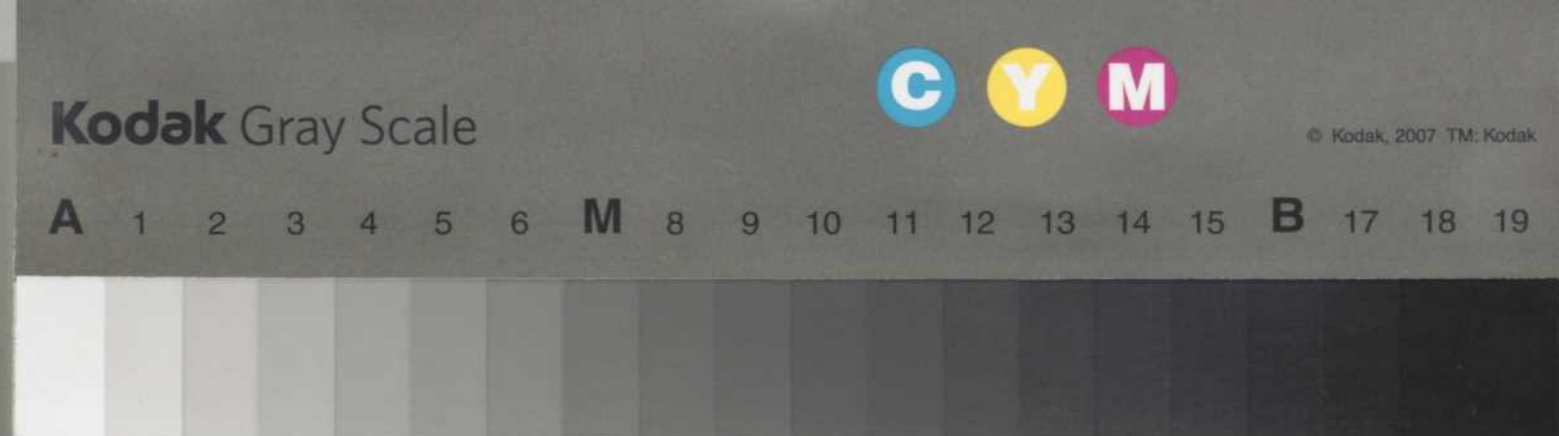
三孝子の記事

下野 鈴木之徳著

孝子平藏之事を記す

平藏之上横町甚き清う子なり甚き清本大宮
村の者なりし故ありて中町は店を借り又田
中町に移り又宮浜道に移り後居を上横町に
定む數回失火に遭て難渋し貧しき暮し
より甚き清生來酒好き一日酒を飲たれ鬱
こして樂きりる是時平藏年十六七より栗柿
菓類の荷い賣して僅の商より渡せりこれ



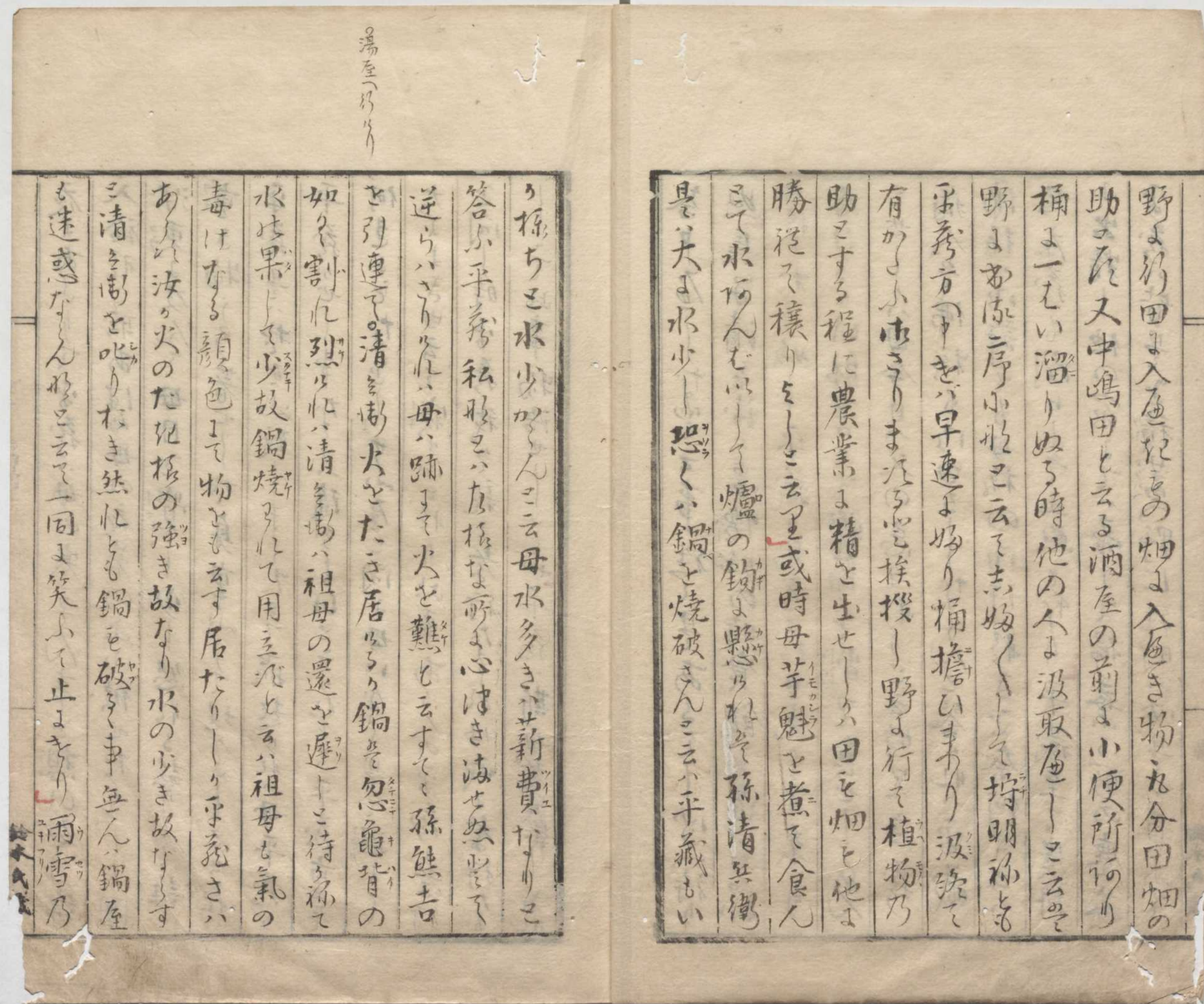


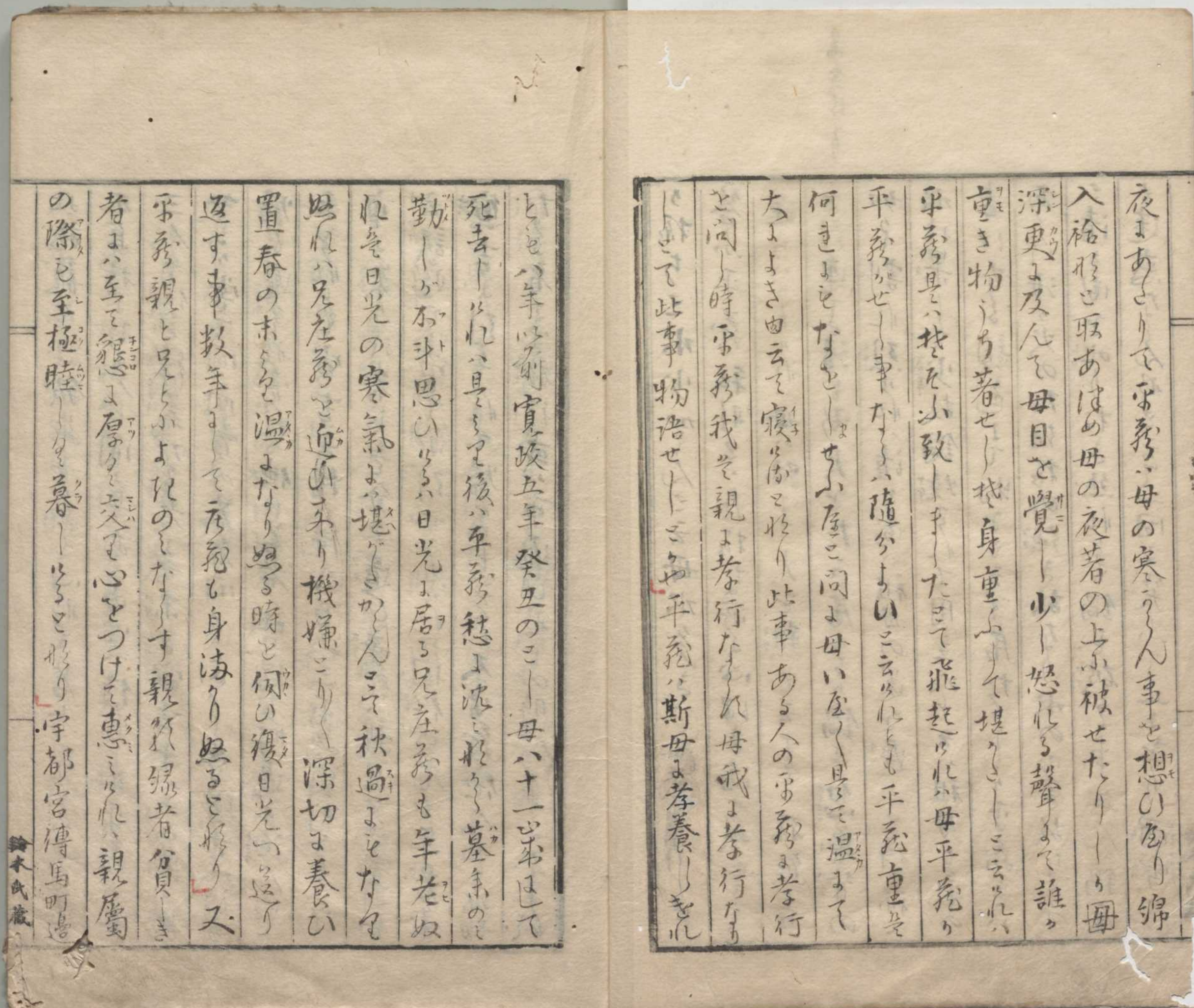


しりはる是時も藥餌を深切より看病しは
こもり是より後をいり日と閑なりき事ありても
毎目墓はいりと缺くことなし日の短き時ハ朽木
宇都宮の市へ夜をこ免て行事形なりて必墓
糸しきなりこなり父既と歿してより後ハ又世
間の贈答耕作此事を高く賣る引の事と
一切萬事母の指圖を受ておろひ自分の了
簡一向は用ハ終令不都合なる事有とも母ハ
指圖次第にてお行ひられ外へ出る人ハ返答
なす處き事を何れ宿は歸里母は承り返
答中趣しき事往て是あることハ待つ
ぬ長子清を請り妻懷妊の時食餌を進め
はかりぬぬし平藏兄左衛門日光より來り
居けりし時躰を見て輕節を削り食せしめ
こせしハ母今日ハ父の忌日なりこ云時兄左衛門
病人を佛極も申さるしなりこ答はるハ平藏
佛極ハ許ても母極の申す形きと奈何こ云ハ
兄左衛門も閑口しと止ぬとなり平藏至て農耕
ハ出精し他の家よりハ歸りて掃棄る所の塵芥
平藏ハ皆是と積置野に往時ハ必是を負ふ

鈴木成雄









鈴木氏藏

243

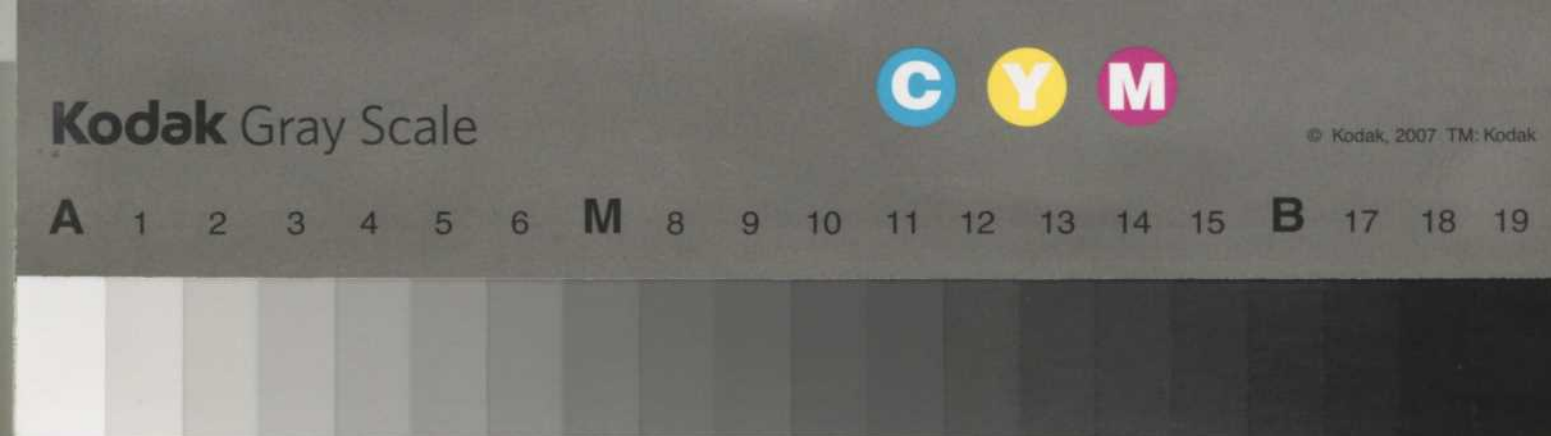


主一由我らも其通り致し侍るゝ返答
たり今茲寛政庚申に至りて平務年六十一
昔者曾參事曾也能養其志曾元事曾也
養其體而孟子取其養志則志之重於體者
可知矣今觀平藏大小家事一切問之父母及
魁鯨節之事而見其能養志也然則缺體之養
乎曰否廿四文之酒三十日之被可以見口體之養
矣且平藏事其親也孝事其兄也悌則于其妻教
于其三子親其族善其朋友勤勞稼穡而貨殖不
怠若平藏者農高之民宜以為矜式

孝子彌曾ハ事を記す

彌曾ハ其御成橋次郎右衛門つら子なり元來其の學ひ
形こせ一人もあふれとも天性の孝行者よ其父母乃
命よ違ふす孝養一侍りきる或時役よ棄一江戸に
到て還りきる時父還りの遅きと怒り腹をたれハ
弥曾ハ大に恐懼して漸く辭謝一是より後江戶
鹿沼迄二十七里の陸路を一日半宛又還りきる形
亦男ハ少児頃ハ容姿よき方の男形れとも慎深き者
小しき男男女の道ハ吐しよといふ程有る郷
里の人も是を信し婦女の神も寺ありし野は山





是遊の時亦曾分托し遣せ人な心とわく事なり
其人は信やういふ事斯うかゝり又いふもき若者なり
亦曾八々在を見ては戯言出す者と無りこゝなり
人憚る事も亦斯の如し斯ありれば父母も亦曾八
於て心は苦勞する事なり形よりこゝなり明和六年亦曾八
廿五歳の時伊勢系宮へ歸りて諏訪の驛より馬士
大に駄賃錢をせりれば亦曾八怒て何を必しと汝と
傭人こそ同様の内微力の者六人分の行李輕尾二
奴程もありはと天秤をて和田領と荷ひ越しこゝなり
是時同様の内上様明嘉を掛こざる者道中も大に病
轡を載て歸りて亦曾八晝は轡をつき夜は枕もこゝ在
て看病を盡しき追分の驛に至り同様の者皆
飯を女を買て亦曾八我の器量を惡しこゝも
歳より眠る女と求たりと云れば人皆何人物れ
りしと思ひし先ず亦曾八任せは其方又寝んとするは
及んで亦曾八女は向ひ此病人に我を逃れぬ中の者も
毎夜眠りて看病し大に疲れたり持たずこゝ一夜
なりとも亦曾八女は我に代り看病し給はん屋に
云はせ女も亦曾八を奇特なりと思ひしや四夜眠
すしてせしと云ふ安永三年甲午七月黒川洪水にて

鈴木成雄

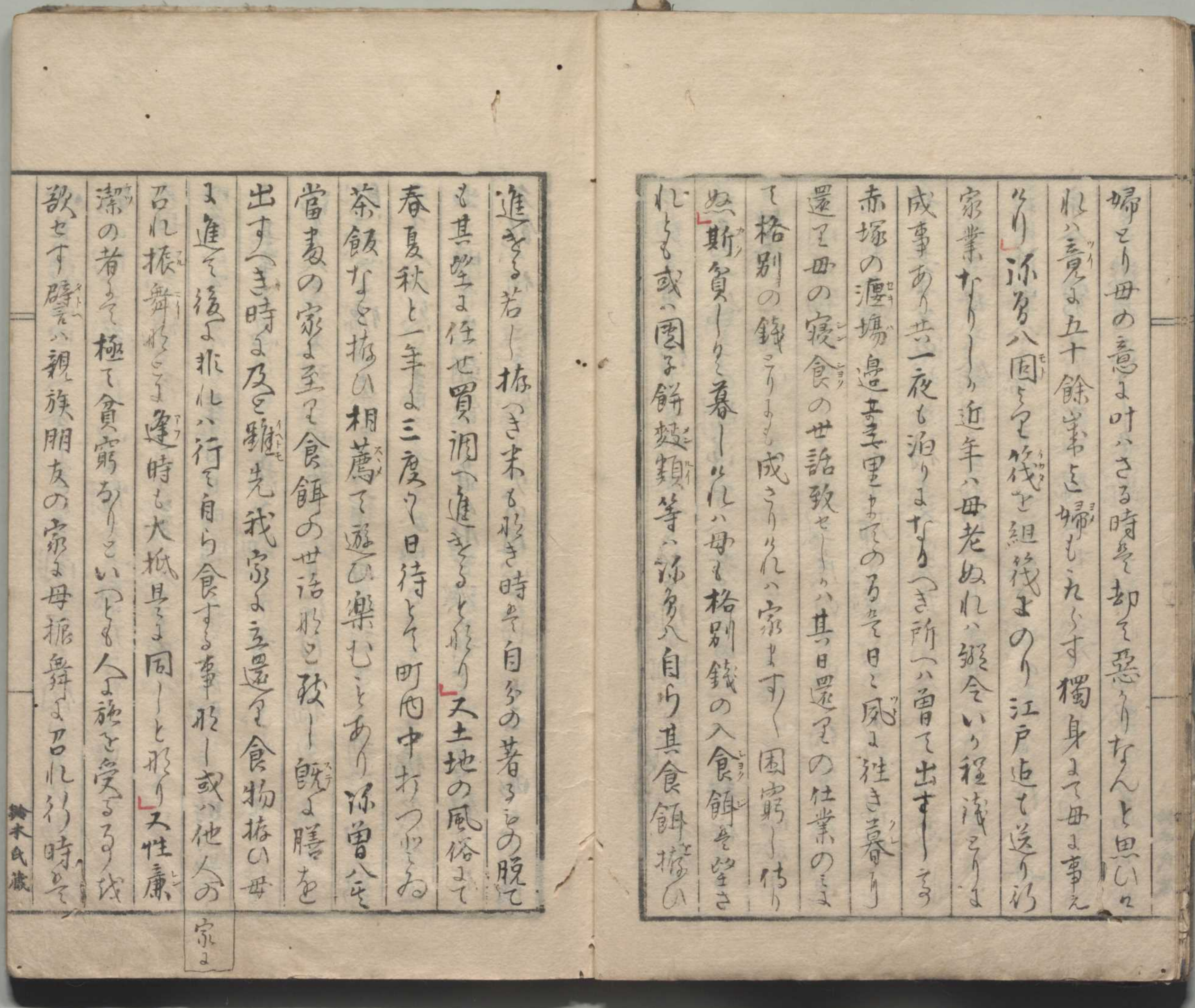


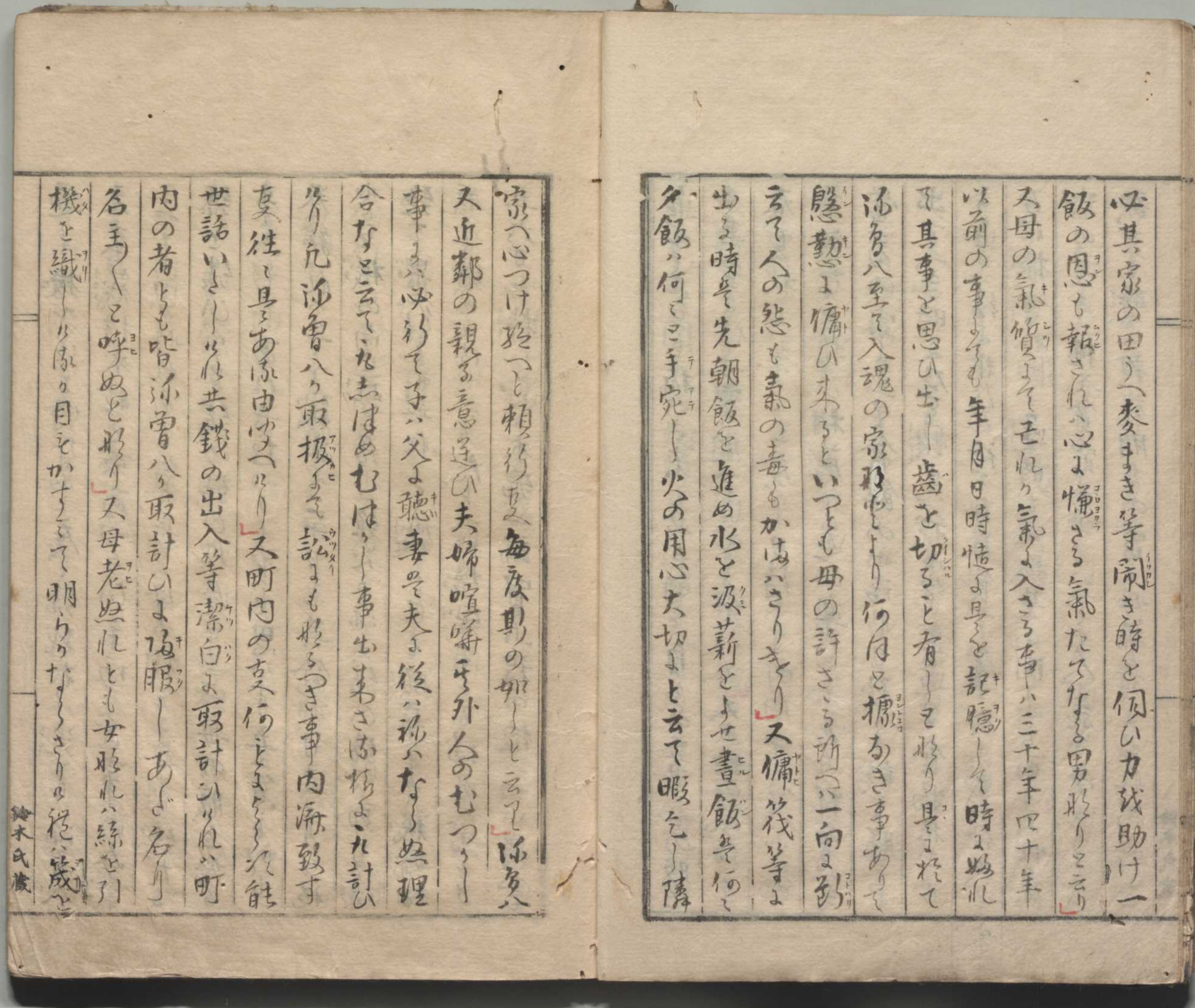


御成橋氏家多く漂没し侍りぬ是時河曾八夫父母
として水と避しぬ血氣の若者僅に三人のり各家財
器用と流さしこ営みぬ水まわく漲り来り河曾八
家五六尺も浸しぬ父母在者の長居すき所は
非こそ水と泳て逃しぬ時河曾八狗足は傷ありて涸
と能はず幾と將に溺死せんとも河曾八是を見て曰
是も亦父母の愛する所殺しぬすこそ狗の足を捉て
肩よりけ水と泳て逃れしぬり天明八年河曾八已
十七歳の時父次郎ちあつ七十餘歳を死去し是が
此時は看病なりと能動られぬ其時母は健也
父は事侍りぬはさる孝行も顯れぬ父死す
此前十餘年の際河曾八孝養の故に耕作の事
ハ勿論凡勤勞此事と作す日夜近隣の家の遊び
世間の物語もこれと樂まれ三度の食時も彌曾八往て迎
ねるも今歸んかぬと云て歸る遅き事あれハ河曾八を
母と共に父の歸を待て父は先たつて食する事形ありし
こあり母は餘ほこ氣むつてき方生れつきも有き
れハ河曾八婦なり此世話致す媒の者有れども母ハ
家貧窮なれハ終令婦取たり共食しむべき物も無
なりは彼是をわたりと斷りてきれハ河曾八を萬一あま

鈴木成雄

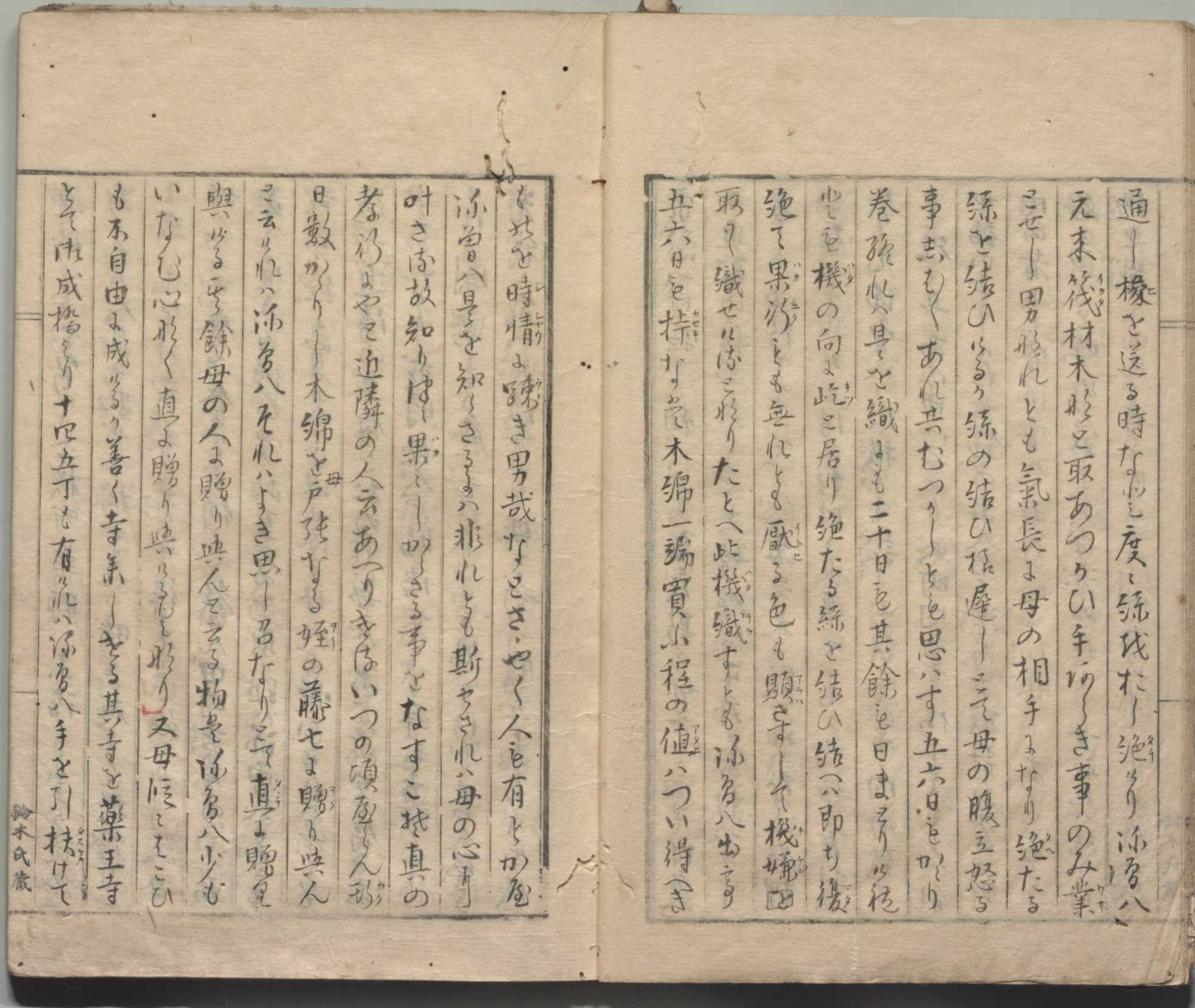


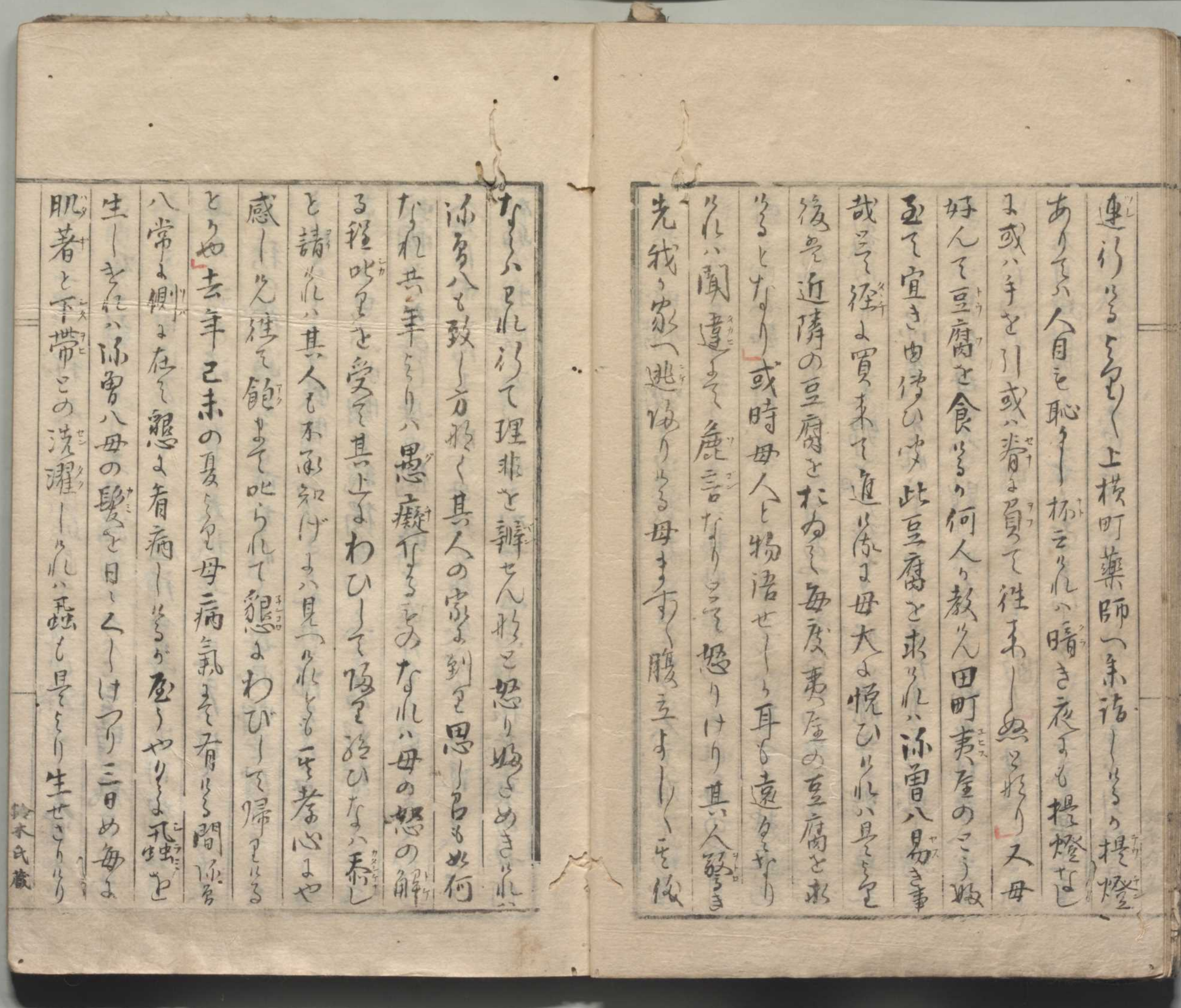


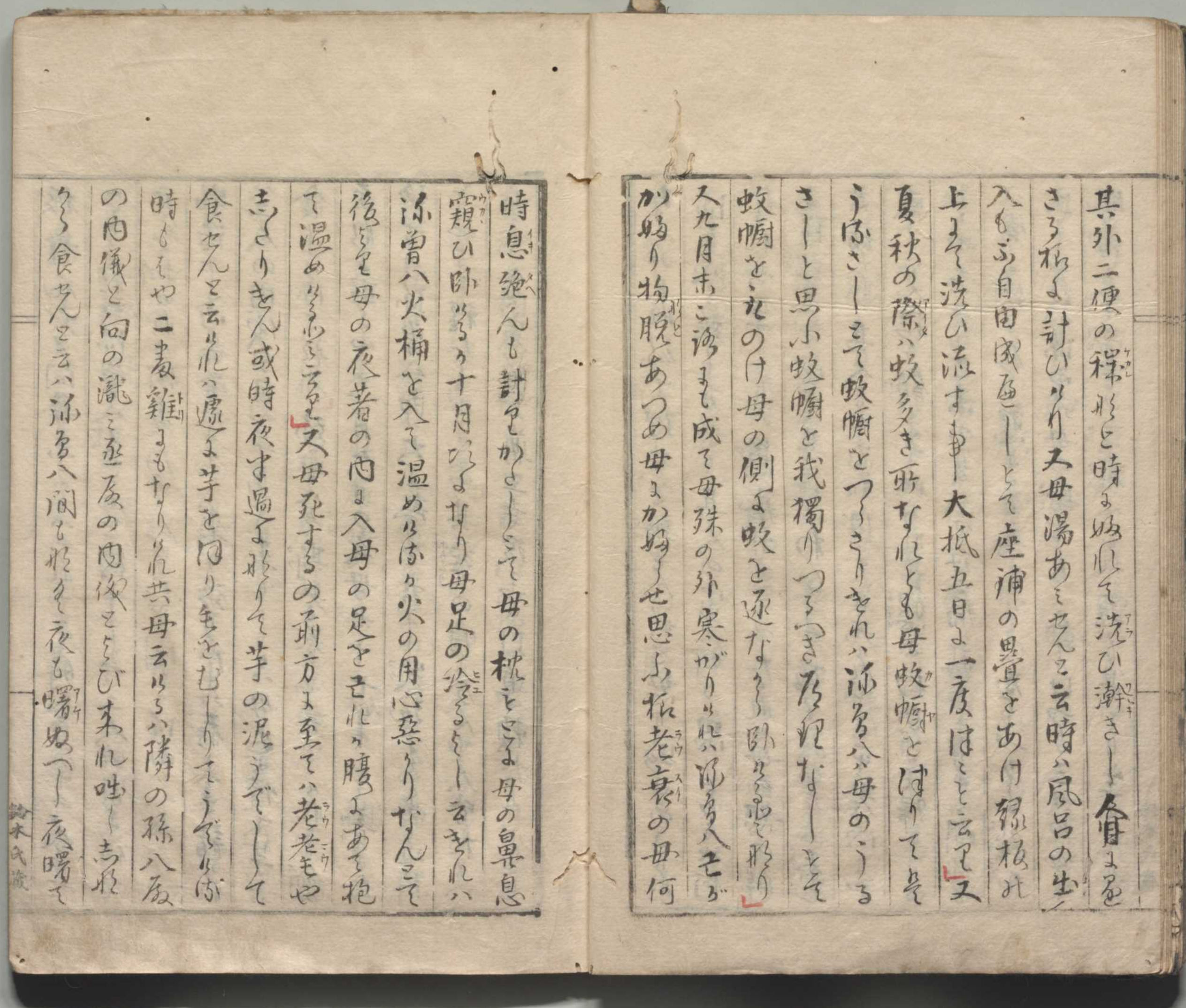


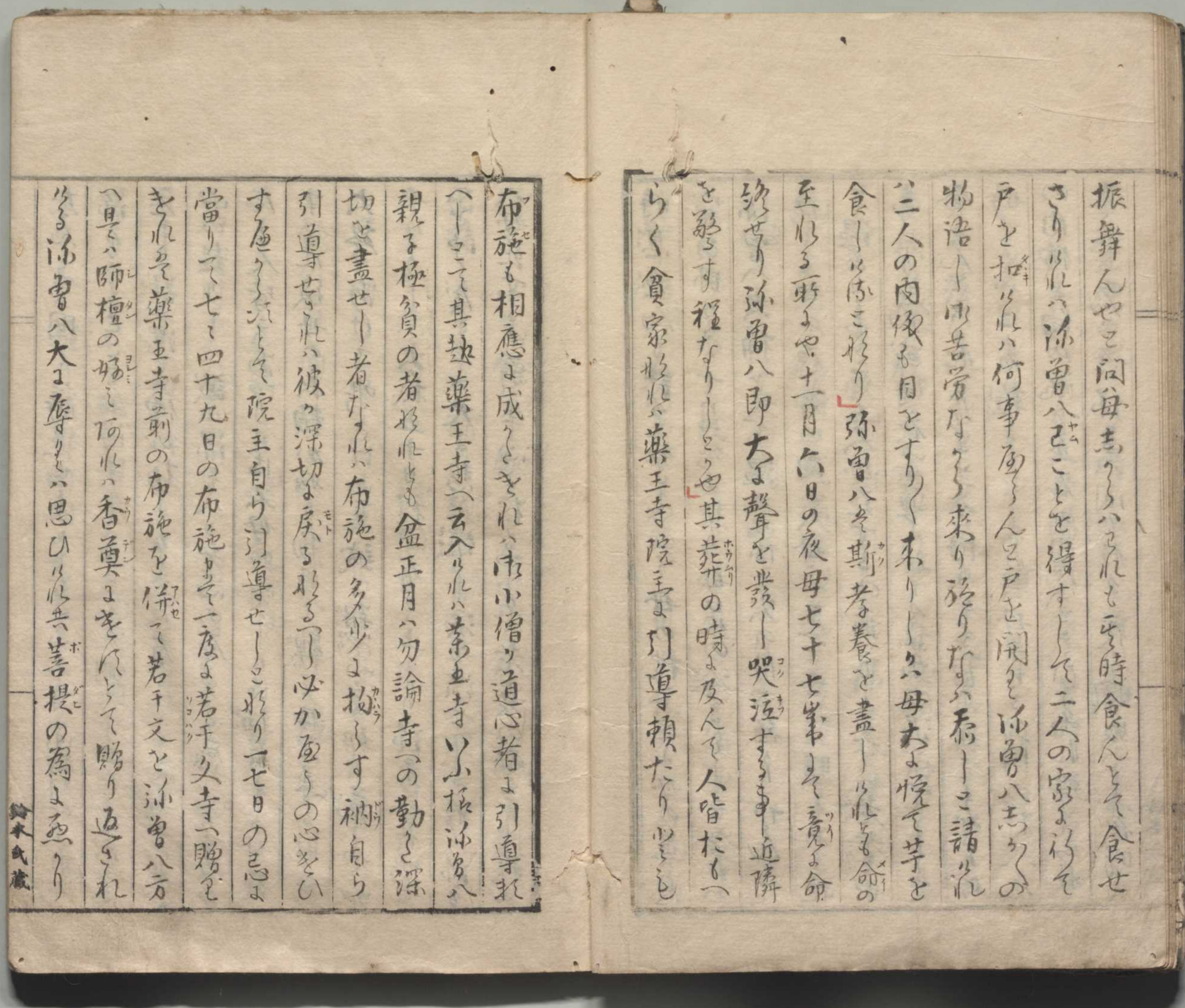
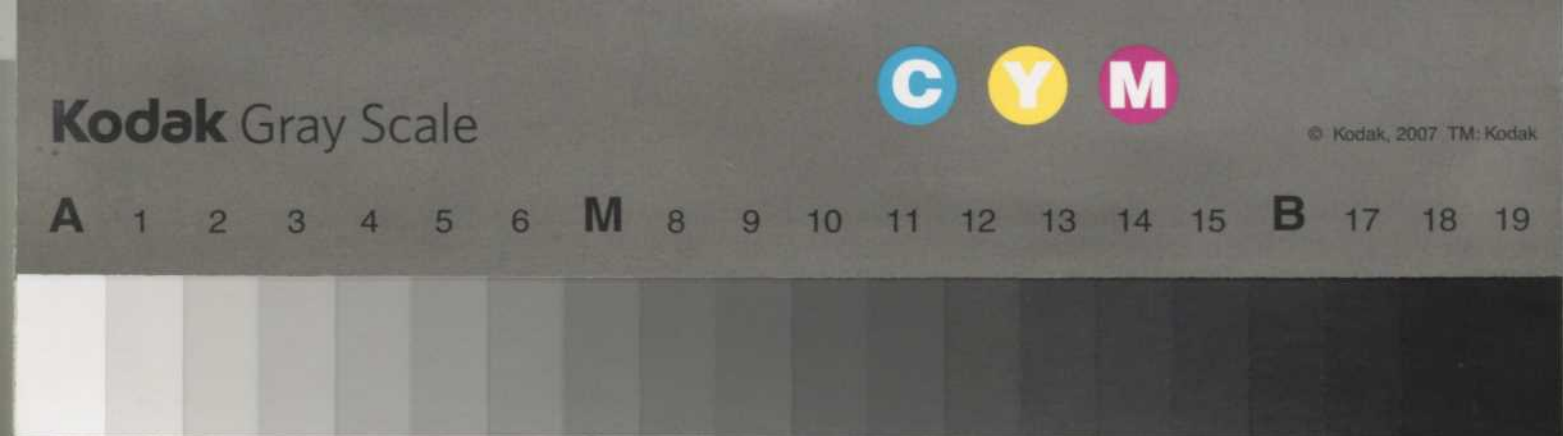
鈴木成雄

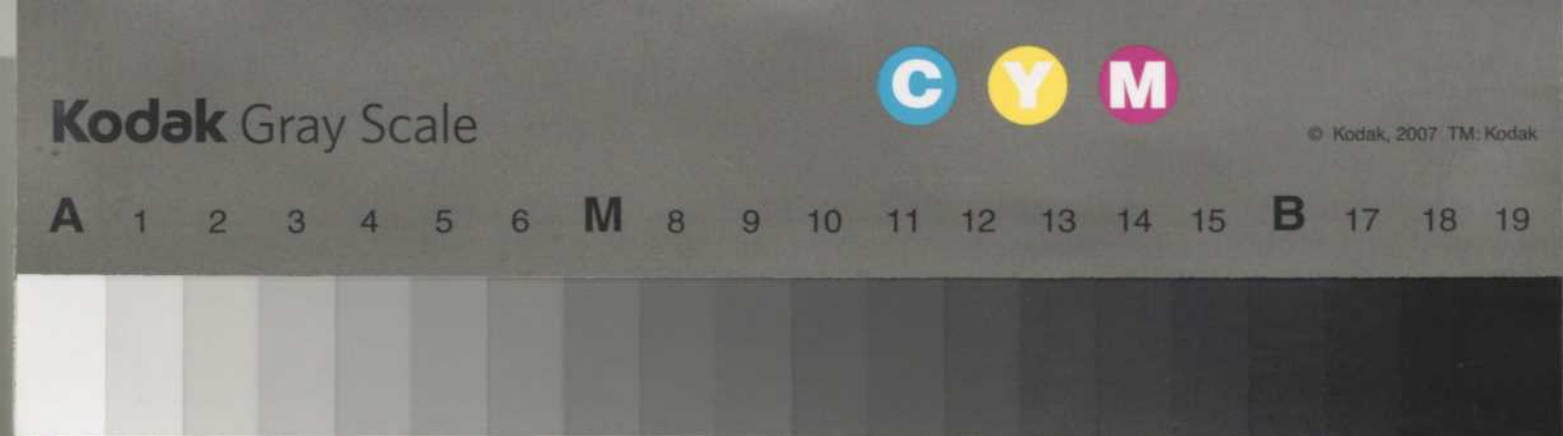








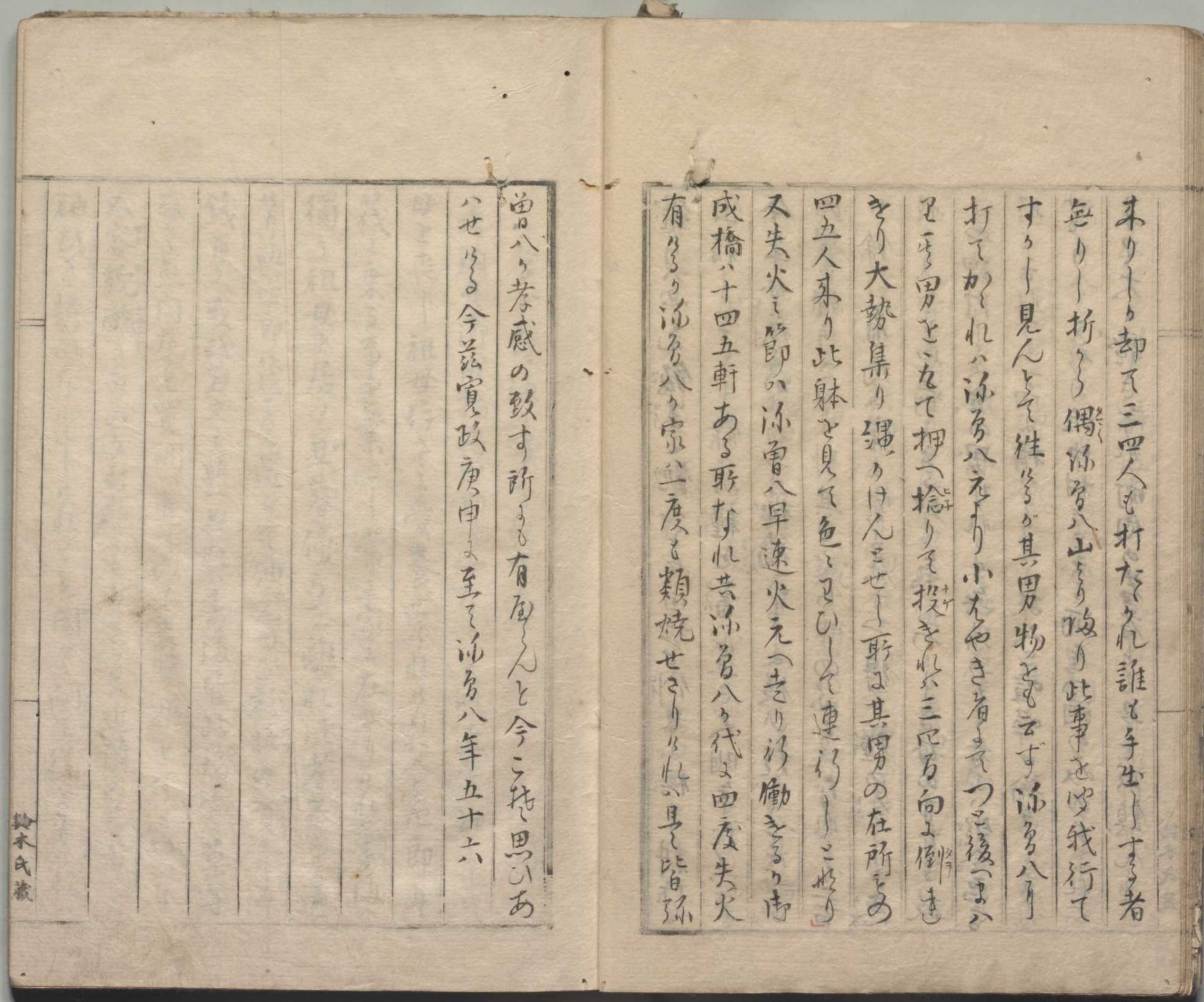




なんとて固く辭退せしりとも茶王寺承けしを
流るるもここを得ずし其を受納せしなり茶王
元より慈深き僧の極まれきた有しりとも斯意悲
心の起りし誠し流るる孝心の厚き感しりとも
んと人皆云あつりし母の愛しりし猶有しり母死
する此後母の衣類かぬり物類と觀て母と尋る跡まで
大聲あけて鳴さけふ其誠し相慰ふる如く慕ふ如
くなりし大抵五十日程も有て止まり流るる其鳴こ
つと少度こと大い悲と催し涙と流せしなり流る
る母死するの前年心なむつり老衰の母も疾よ
罹らば先飯米を飢んとて田地を例年より倍し耕作は
出精し半こし餘りの糧と蓄へ置き又明年なむつ
今年母疾よかりそ稼穡の事は後の難しとて一畝
の田も作らざる其日ぐらりの流るるなりとも二
日餘の看病は常に家な在りしを得る糧の令しき患
なりしとて前より如く氣むつりし母の子なり故
もや理はる方男なりとも無法のむら者なり強令惡言
形と云はる一向に構はるる故人と喧嘩口論せし事ハ
世りしなり唯中村を云る酒屋へ酒のみのあふれ老
来り大い騒ききりし町内の若者とも是を取鎮んこそ

鈴木成雄



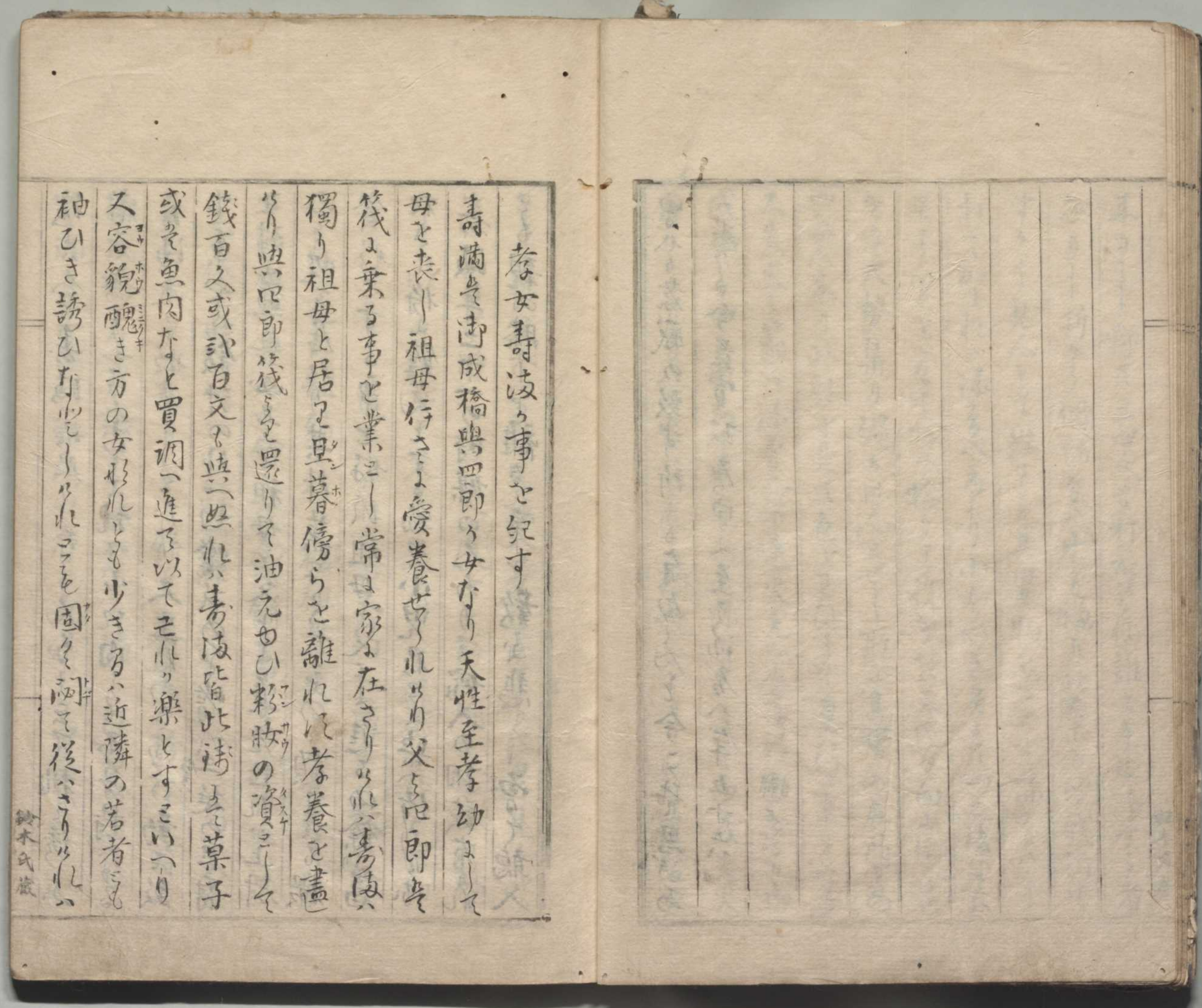


来りし者却て三四人も打たれ誰と手出しする者
無りし折々偶々八山より降り此事を以て我行て
すくし見んとて往き其男物をも云ず流るる
打てかれし流るる八より小をきき着きつて後へ
其男とてなて押へ搦りて投ぎし三匹も向ふ倒れ
きり大勢集り強りけんこせし其男の在所を
四五人來り此魁を見て色こし連行しこけり
又失火に節ハ流るる早速火元へ走りけり
成橋ハ十四五軒ある所なり共流るる八代ハ四度失火
有るり流るる八代ハ二度も類焼せりりれハ是れ皆孫

曾ハ孝感の致す所も有るんと今こけり思ひあ
はせり今茲寛政庚申に至り流るる八年五十六

鈴木成雄





孝女壽波の事と記す
壽満寺御成橋興四郎の女なり天性至孝幼より母を喪ひ祖母行さる愛養せられり父は即ち母を棄る事と業に常は家より在りり母は壽波に獨り祖母と居る旦暮傍らに離れに孝養を盡し興四郎は後を還りて油元也い粉妝の資を以て錢百文或は百文も興にぬれり壽波は皆此壽波菓子或は魚肉なりと買調へ進み以てそれ樂とすこいへり又容貌醜き方の女なりとも少きるは近隣の若者も袖ひき誘ひたりりこれをも固く断て従はざりり

鈴木成雄

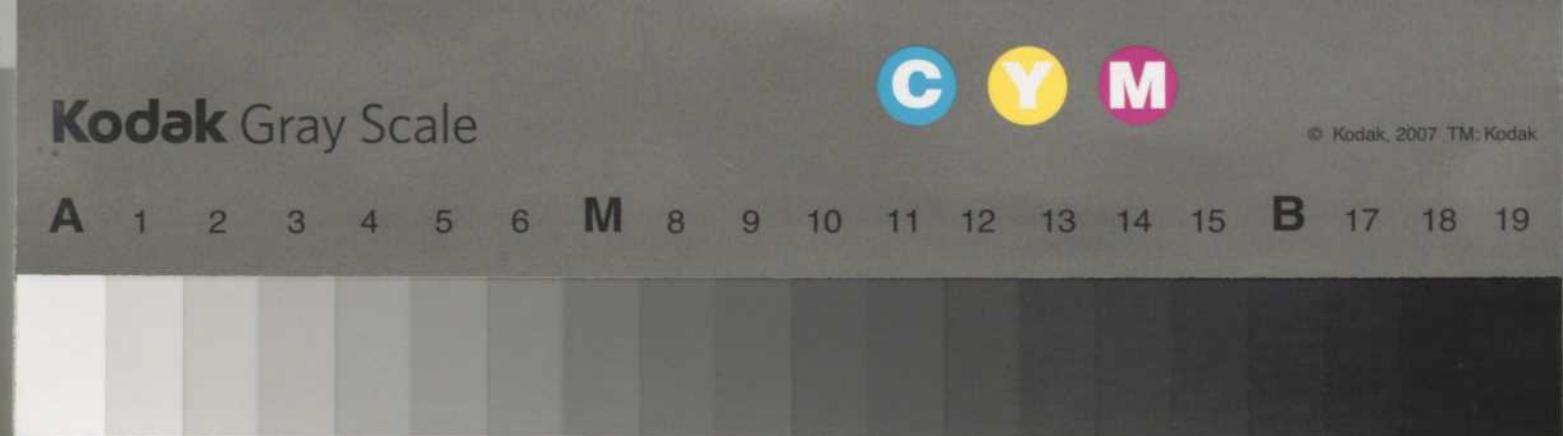




後ハ人々を妻は、成程、な、んか、と云て挑、誘ふ
者、を無、り、せ、り、と、云、て、少、れ、肉、を、不、身、持、な、る
を、沙汰、も、形、も、こ、な、り、又、生、れ、つ、き、度、勤、を、致
す、事、や、飯、汁、の、外、一、切、食、物、を、嗜、ず、譬、言、一、挺、の、豆、腐
を、汁、に、煎、れ、必、是、を、祖、母、と、父、と、進、免、さ、れ、上、計
の、吸、て、居、れ、其、外、菓、子、く、た、も、の、類、も、も、撮
食、料、と、す、る、事、と、好、け、祖、母、と、父、と、進、免、の、餘、當
お、き、て、將、に、鐘、を、と、す、る、物、を、小、兒、が、も、興、へ、侍、り、は、
嘉、永、年、二、十、一、の、時、媒、の、人、あ、り、て、嫁、入、の、相、談、有、れ
とも、親、の、膝、下、を、離、る、事、を、歎、ふ、悲、う、て、曾、て、聴、入

さ、り、り、父、と、母、と、兄、孫、八、等、と、す、る、に、異、見、し、り
は、れ、ハ、己、事、得、す、と、大、蘆、と、云、所、は、嫁、し、き、り、故、
な、り、祖、母、と、父、と、を、異、見、し、て、立、還、り、は、れ、ハ、と、母、
等、又、異、見、し、遣、り、は、れ、と、又、行、又、還、り、を、數、度、
及、は、れ、遂、に、離、縁、を、し、り、復、祖、母、と、父、と、を、孝、養、し、り
是、時、祖、母、年、七、十、餘、及、ん、て、餅、蕎、麥、を、嗜、は、れ、其、
望、は、任、せ、時、は、娘、を、俄、に、餅、を、つ、き、蕎、麥、と、う、つ、度、
は、是、あり、こ、な、り、も、餅、末、蕎、麥、の、粉、な、き、時、は、
御、成、橋、と、い、戸、張、り、七、八、丁、も、隔、り、け、れ、其、走、り、往、て
買、調、進、り、此、往、來、の、序、は、近、隣、を、買、調、の、形、と、托、

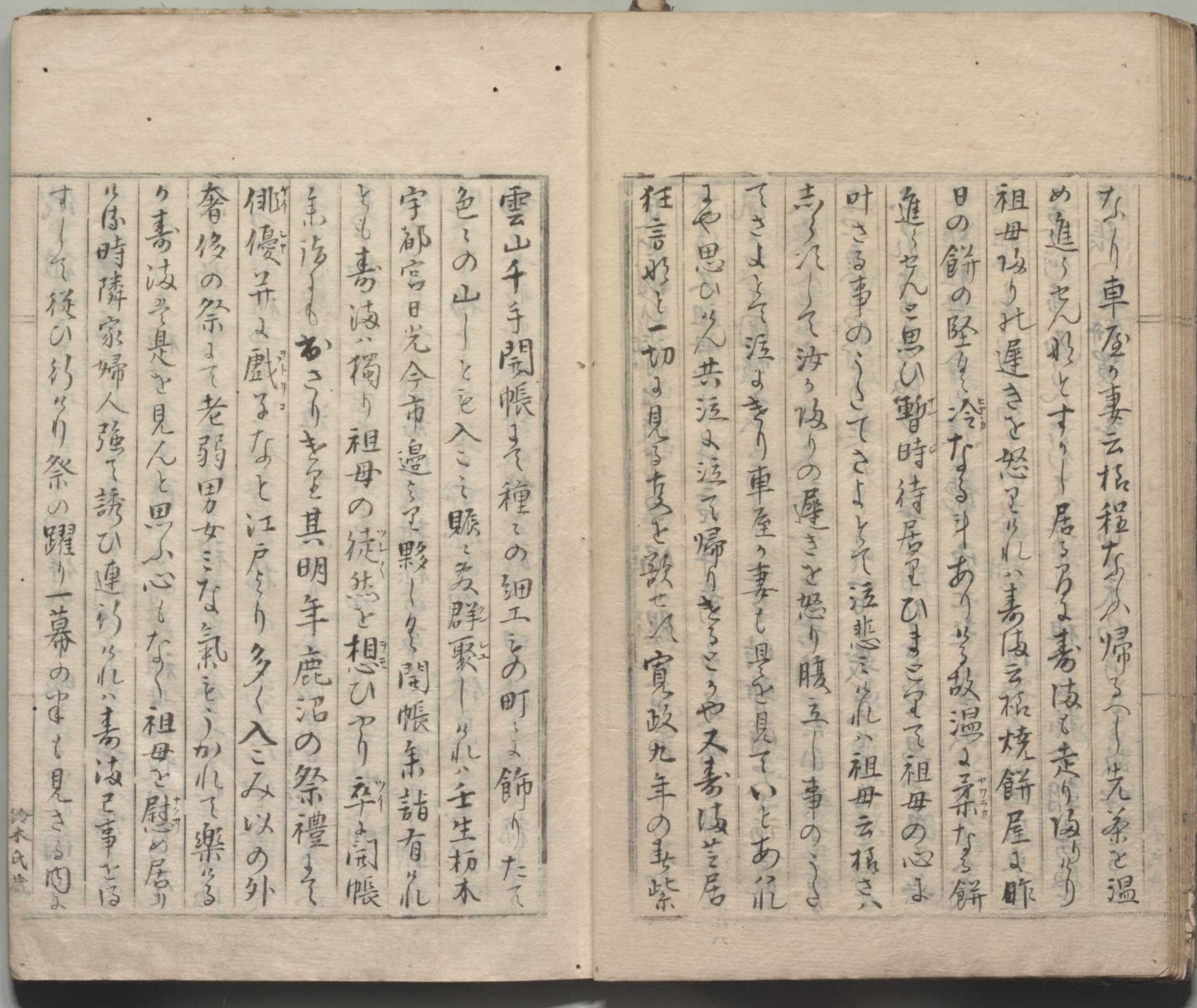




足と洗ひ脊と流す事偏^{ヒナ}嬰兒^{エライ}とありらふ如く
なり又祖母死する此三四年前より足屈を伸^のべられ
夙^{ソク}に起て圍爐裏^{イロ}にあそびせり時暫時火をいれ
又寝んと云寝せよ又起んと云妻は一たい食するもの
三度度も寝たり起たり一日は幾度と云事を知らず
夫れも妻は少くもせりなき程と思ふ色も無
く唯祖母の命の儘に聴き寝せ起し志奴と称し又或
時祖母妻はを痛く呼聲頻りにいふハ隣家車屋
の妻何事ぞんこ行て尋られ祖母云極今朝妻はを
戸張へ焼餅買ふをいふ未ぬらさる故呼をるこ

頼事ある能人の用をもたしめども若祖母の早
く還れと急ぐ時人頼も肯^{ウケカバ}はれ飛^{トビ}り如く往來
ぬるなり又祖母年九十頃より足腰も立ぬ極成
二便も近々成れ夜中六七度も寝せ起し腰と打
足を摩すなりとて終夜眠らずとて夜を明しぬ
れとも翌日眠る事なしといひ妻は眠を欲せざる
に食を嗜^{ウケカバ}さる色と好きふとの三の事皆近隣
の人れ知る所なり又妻は力あり祖母年九十餘年
たれども老養の故や瘦衰す身も重かり
ふれと小児を抱く如く輕く抱て風呂に入らせ手





鈴木成雄



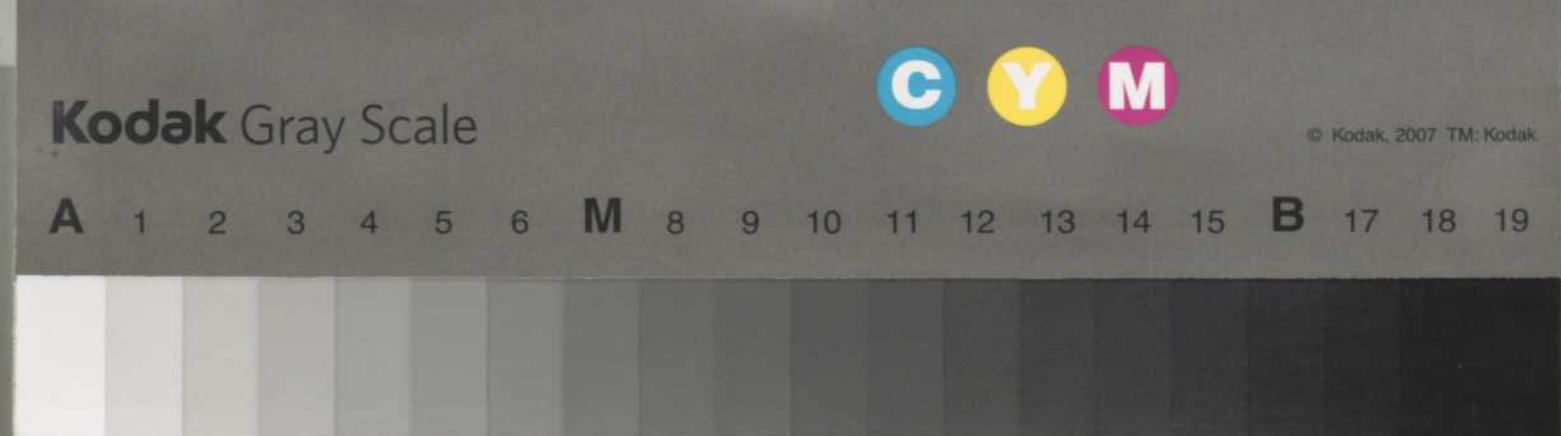


俄に祖母の苦勞なり。同伴のふ暇をいへる。同伴
の者色に留るれども耳も聞えず。走る歸りも
とあり。又祖母食すはる。時を祖母此悦びなり。と
思ふ物こころ進れども祖母多し食せこれ。妻は
せつと祖母の進んと思ひ振。いふとたんと食して
下されぬと云て泣く。みり。妻は只口體を養ふ
妻を知りて志を養ふ事を知りこれ。情に則至
れ。と云つ。妻は又耕作の事。又出精。朝
晩まで物とも云はす。隙の間も休息する事。終
勤る女形。農耕の持。於てハ男はきりと稱せ。

此ころ祖母日増し老衰。捨て野に行事
もな。きり。父も。常。云。振。れ。七十餘の
老人。なれ。も。猶。耕作の事。と。作。へ。寝食。乃
事。ハ。母。も。汝。も。あ。これ。安ん。給。さ。故。汝。を
宿。居。何。の。事。と。知。す。つ。な。も。云。て。多。を。思。
の。野。出。は。り。也。此。口。體。も。亦。孝。心。ある。者。と。謂。つ
へ。妻。は。父。の。年。を。耕作。又。骨折。さ。大。の
苦。勞。せ。り。父。の。命。な。れ。致。し。方。け。く。宿。居。
は。時。祖母。の。機。織。と。り。す。置。て。野。に。走。り。
父。の。仕事。と。助。て。歸。る。と。り。妻。は。ハ。誠。を。

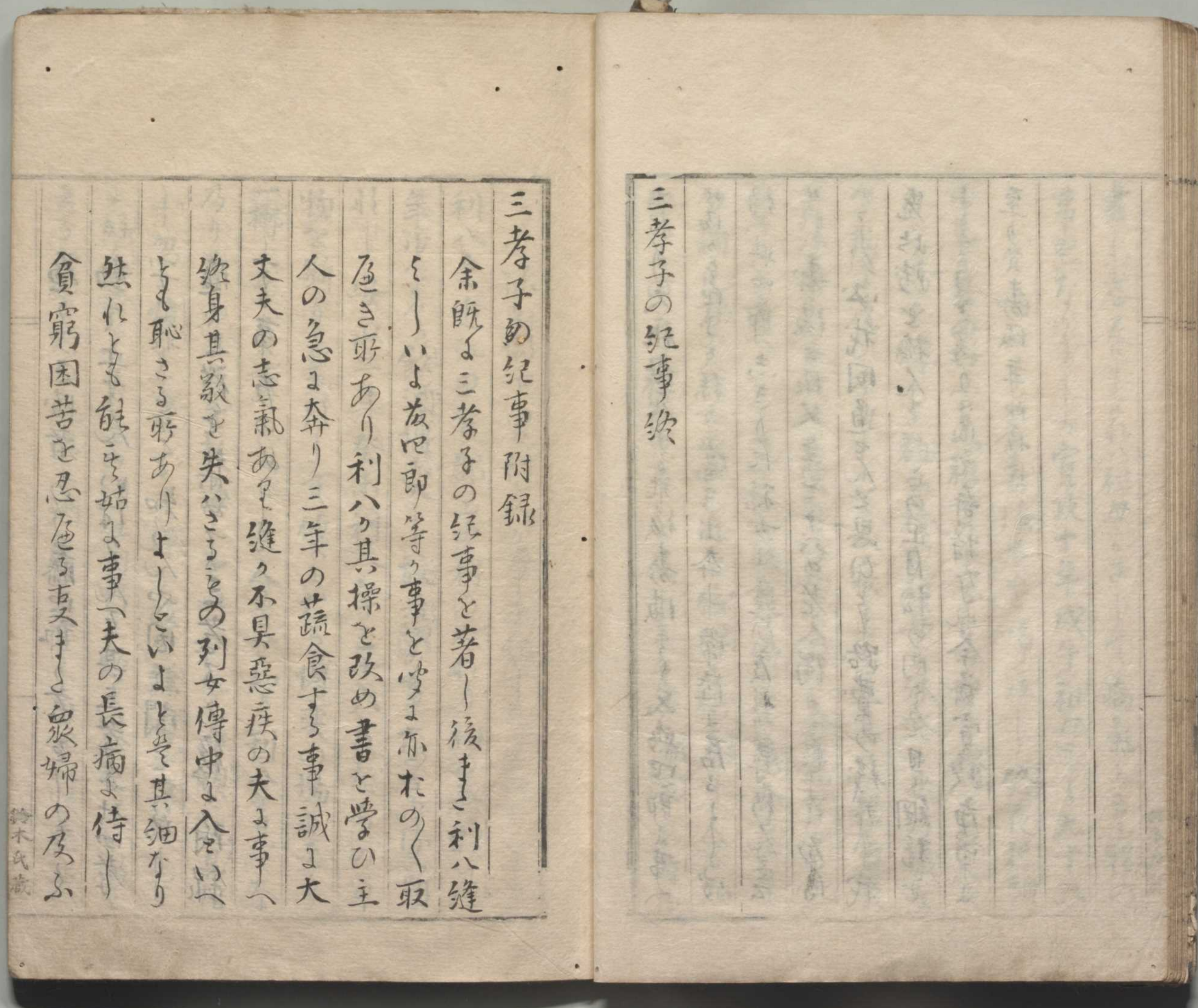
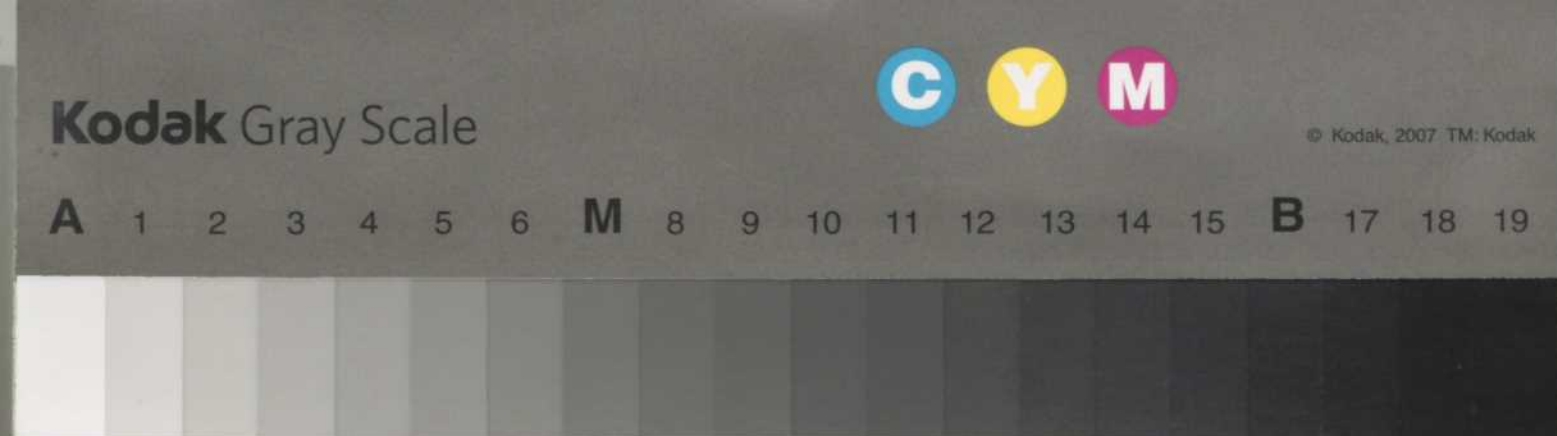
鈴木成雄





盡く孝養し此祖母もさして病氣と云ふ程の
事なりしに寛政十年戊午祖母三十九十六
より病死し其妻は是を啼泣し終夜枕頭
小在りて其祖母の生る日の如く曙を及んで
自ら湯を燂し祖母を沐浴させ汚穢な
き極く洗ひすましめて又寝し置其後親屬聚
り沐浴しき故二便の汚なりし奇麗なる屍
形と云ふありきさて其後葬終りて後香花を
勿論凡百の食事に必これと位牌は供養し人々物
かどりの序祖母の事と及ぶとき必啼泣し待候

と形り又祖母死す此後妻はもと又典四郎と事
ありき此孫女嘗て出奔し常陸に居るに
此典四郎志きりて孫女と逢ひ度なり尋ねん云
此ハ妻は云振父年七十八の老人獨り居るに
此ハ必我國道せんと思ひとも路費の淺なり我
先此涉と振んと云この正月松の内と云日網孫と
より日を送り此孫奇持なり今茲寛政庚申と
至りて妻は年四拾也



三孝子の紀事附録

余既よ三孝子の紀事と著し後また利ハ縫
と一いよ故也即等う事とせよ亦たのく取
るべき事あり利ハ其操を改め書と學の主
人の急は奔り三年の蔬食する事誠は大
丈夫の志氣あり縫く不具惡疾の夫は事へ
終身其敬を失はざるもの列女傳中に入といへ
とも恥ざる事ありよしといよと其細なり
然れども能く姑く事へ夫の長病を侍り
貧窮困苦を忍るる妻と衆婦の及ふ

鈴木成雄

三孝子の紀事終



